

合理的配慮の提供事例報告書【中学校】

事例の概要

生徒Aは、自閉症・情緒障害特別支援学級の生徒である。自閉症スペクトラムの特性が強く表れており、B市教育支援委員会では特別支援学校への入学が適切であるという判定がなされた。しかし、本人、保護者の強い希望で地域のC中学校へ進学し、特別支援（自閉症・情緒障害）学級へ入級している。本来は常に個別対応が必要と思われる生徒であるが、C中学校では自閉症・情緒障害学級生徒が他にもいるため、常に1対1の体制はとれない。

主に、学習サポート、コミュニケーションや生活面でのサポート、健康面や心理面でのサポートを自閉症・情緒障害学級担任が中心となり、学年担当、教科担当の教師が連携して行っている。

- | | | |
|------------|------------|------------------------|
| 1 対象生徒の障害種 | 自閉症 | 知的障害 |
| 2 障害の程度 | 非該当（知的障害） | ※学校教育法施行令22条の3に該当か非該当か |
| 3 在籍状況 | 中学校・特別支援学級 | |
| 4 学年 | 中2 | |
- 5 対象生徒の実態

自閉症スペクトラム症＋軽度知的能力障害 ・療育手帳 B1
 独り言を言うことが多く、どこかで聞いた気に入った言葉などを繰り返し言うことが多い。授業中にも大きな声で独り言を言っていたが改善されてきた。適切な言葉で、事実や自分の気持ちを相手に伝えるのは苦手である。
 教師の支援や事前の配慮をすることによって、体育大会、合唱コンクール、スキー教室、トライやる・ウィーク等、中学校の行事にはしっかりと取組んでいる。
 交流学級では、他の生徒との関わりが難しい。言いたいことを適切な言葉で伝えられないため、会話がうまく成立しない。しかし、友達との関わりを求めるので、教師がうまく間に入ってやると満足している。
 苦手な教科や学習内容に不安があるときは、授業に行き渋ることがある。個別対応が必要である。やりたくないことはしない。教師と話をすることで安心感がもてたり納得できたりすると取り組める。ストレスが高まると、抜毛が見られる。アトピー性皮膚炎の症状もある。

6 対象生徒についての合意形成に至るまでの経緯

（1 誰からの申し出か 2 申し出の内容 3 連携、調整した関係機関 4 合意形成に至った結論）

保護者、小学校の担任から「特別支援学校ではなく、地域の中学校に入学し、特別支援学級に入級したいため、中学校で学習や生活をする上での支援について、合理的配慮をしてほしい。」という申し入れがあった。そこで、保護者、小学校の校長・担任と中学校校長・特別支援教育コーディネーターで話し合った。そして、特別支援学校が相当という市の教育支援委員会の判定であったが、本人や保護者の強い希望で地域の中学校に入学する生徒である為、本来は個別対応が必要な生徒であるが、自閉症・情緒障害学級の生徒の人数、教師の持ち時間を考慮した合理的配慮を提供することになることを保護者に理解してもらった。

7 基礎的環境整備の視点と概要

基礎⑦ 個に応じた指導や学びの場の設定等による特別な指導

生徒Aは知的な遅れもあるため、5教科の学習においては特別支援学級で基礎的な学習に力を入れている。しかし、本人の興味関心が強く得意としている社会科については、交流学級で授業を受けたいという意思を尊重し、普段の学校生活において通常学級の生徒との交流を図る機会の確保を目的に、週1回交流学級で授業を受けている。その際は、教師がサポートにつき、その都度、必要な支援を行っている。また、音楽、美術、保健体育、技術・家庭科の技能教科についても教師1名がつき、活動や製作の支援を行っている。

8 合理的配慮の観点と概要

合理①-2-2 学習機会や体験の確保

特別支援学級の交流学習会で、多くの人の前で自己紹介をしたり、支援学級の小学生を相手に一緒に行動したりし、先輩としての自覚を持たせる取組を行っている。

生徒Aはよく通る大きな声が出せるため、特別支援学級のHRで司会をしたり、短いスピーチをしたり、交流学級の弁論大会の練習をしたりと、人前で話す機会を多く取り入れ自信を持たせた。

合理①-2-3 心理面・健康面の配慮

生徒Aはストレスが高まると抜毛行為に及んだり、アトピー性皮膚炎の悪化が見られたりする。日頃から負荷やストレスがかかりすぎているか注意を払い、クールダウンや休憩する時間を設けるようにしている。クールダウンさせるときは、支援学級や保健室など専用のスペースを確保し、利用するようにしている。

また交流学級や部活動の友達との関わりの中で、困ったことや不安を抱えている時は、じっくりと話を聞くようにしている。相手との話し合いが必要な時は機会を設定し、教師も一緒にいて、寄り添うことで安心する。適切な言葉で事実を説明したり、自分の気持ちを伝えたりすることが苦手なため、少し言葉を補うことで本人の気持ちを伝えることができ、心理的な安定に繋がる。

9 成果と課題

大きな声で話すことができ、いろいろな言葉も知ってはいるが、意味が理解できておらず、適切な言葉で伝える力が弱い為、国語力やコミュニケーション力の向上、対人関係のスキルの向上を図る取組を継続する必要がある。現在は、周囲が伝えたい内容を汲んでくれたり、教師が間に入って通じることが多いが、自分の言葉で正しく伝える力がつくような国語やSSTに取組む体制をつくる。

本人は、校舎や学校の雰囲気等に関してのこだわりが強く、受け付けない傾向がある。中学校卒業後の進路決定については、それらの先入観を払拭できるように工夫しながら、本人の自立に向かう就学の場合、本人、保護者、関係者で十分協議しながら決定していきたい。